

## 我が町のスポーツマン(4)：瀬古利彦

藤原健固\*

## A Man Who Domesticated Sport in His Own Community (4): Toshihiko Seko

Kengo FUJIWARA

## 1 陸上の星

1984年夏、書店の新刊書コーナーに5冊の単行本が並んでいた(本稿は、1984年10月1日に書かれたものである)。どれもマラソンランナー、瀬古利彦に関するものであった。それも10ヵ月という短い期間に相次いで出版されたものばかりであった。それは明らかに1984年8月12日午後5時15分一ロス五輪、マラソンのスタートに照準が合わされていた。いわば、週刊誌的意図と期待をもって時代のスター、瀬古利彦を浮き彫りにしたものであった。一方、瀬古の出場するマラソン中継は、しばしばプロ野球の視聴率を凌駕し、新聞・雑誌も瀬古から目を離さず、瀬古番と呼ばれるつきっきりの記者までおくところも現われた。これらマスメディア、とりわけスポーツジャーナリズムの英雄的扱いは、虚像をつくりあげ実像を背後に押しやり、本質をまともに見ようとしないう癖をもっている。

その癖にスターがどっぷり使った瞬間、ジャーナリズムは一転してスターをただ以下の人に蹴落としてしまう。マスメディアの受け手が、生理的にそれを要求するからである。

しかし、28歳の華奢な一見どこにでもいるよ

うなこの現代青年は、マスメディアの落とし穴とは縁がない。それは170 cm, 60 kgの身体からほとばしる清楚で力強く端正な走りが、心に支えられているからである。おごりがない。それは軽くひょい、ひょい、と世の中を渡る風潮を拒否し、ひたむきに情熱と信念を大地に叩きつけて走る、その足音がリズムカルに作動しているからである。心で走る、この青年の心とは何か、またそれはどのように養成されたのであろうか。

瀬古利彦は、昭和31年(1956)7月15日に三重県桑名市友村で生まれた。子どもの頃から負けん気が強く、性格は明るかった。野球もやったが、走りの速さを買われて陸上に転向した。中2の時、三重県中学校秋季陸上2,000メートル走に出場し優勝を飾ったのを皮切りに、中3の陸上三重県大会で2,000メートルで中学新を出して優勝、800メートルでもトップでゴールインした。高校に進学してからの3年間は一色幹夫の指導の下にその活躍は目覚ましく、“怪物”と呼ばれるまでになった。初めて長距離走を体験したのは、高1の時で全国高校駅伝で区間10位であった。高2の時、三重インターハイで1,500メートルと800メートルで優勝し、早大OBの織田幹雄から「君は素質がある」と声

\*教授

をかけられた。この一声が早大進学を決意させた。この年、千葉国体でも活躍し1,500メートルと5,000メートルで優勝を成し遂げた。高3になると、福岡インターハイで800メートルと1,500メートルで優勝、また笠松国体では1,500メートルで高校日本新(3分53秒4)、5,000メートルでも自己新の14分33秒0を出して共に優勝した。

昭和50年、早大受験に失敗し、南カリフォルニア大に傷心のスポーツ留学後、翌51年早大教育学部に合格。3月26日中村清との出会いをきっかけにマラソンに転向。大1の京都マラソンで10位(2'26"00)、大2の福岡国際マラソンで5位(2'15"00)。大3の時、福岡国際マラソンで1位(2'10"21)。大4で福岡国際マラソン1位(2'10"35)。また、ボストンマラソンに初出場し2位(2'10"12)になった。

大学を卒業と同時にエスビー食品に入社。社会人1年目の福岡国際マラソンでも1位(2'09"45)。社会人2年目ボストンマラソンで1位(2'09"26)。社会人4年目東京マラソン1位(2'08"38)、また福岡国際マラソンでは4回目の優勝を飾った(2'08"52)。

## 2 走りの美学

マラソンは、42.195 kmを如何に速く走るか、という競技である。しかし、それは身体的精神的社会的ハンディとの戦いでもある。

瀬古の場合、胴長で短足、これが身体的ハンディである。とくに西欧の長身ランナーと比較するとき致命的とも思えるハンディである。しかし、長所もある。とくに、心肺機能は秀れており毎分の脈拍数は40回前後であり(普通の人では約60回/分)体重1 kg当りの最大酸素摂取量は82ミリリットルと高く、これが「速いスピードで長く走る」ことを可能にしている。胴長で短足なこのランナーの走りは、しかし、美しい。上下動のない、ローリングのないすばらしい走りを見せる。体はまっすぐに立っており、ねじれはほとんどなく、腕は常に鋭く曲げられている。これが瀬古の切れ味の良さであり、さわや

かさをつくり出している。

つぎに、精神的ハンディもマラソンランナーにとって走りを決定的にする。すなわち、自分をどのようにコントロールするか、が問題なのである。しかし、瀬古にとって、この問題はそれほど大きくない。それは基本的には瀬古自身の性格に起因する。

また、社会的ハンディは他のランナーおよびファンと自分の間を如何にコントロールするかという問題を指している。他のランナーとの関係で言う、それは主としてレース展開に集約される。瀬古のレース運びの特徴は、ライバルの後につくことである。そのうえですきをみて揺さぶりをかける。また、ファンとの関係について、瀬古は人気に溺れないだけの冷静さをもっている。

こうした瀬古の寡黙で冷静な走りの美学は、どこから生まれてくるのだろうか。それが練習にあることには違いない。端的には練習の内容と量に、その秘密の一端を伺い知ることができる。まず、練習の内容という場合、走りのテクニックとモラル(やる気)を含んでいる。とくに、彼のモラルは師、中村清の影響が強く二人三脚的なところがある。この点については後に詳しく触れる。ただ、瀬古の足は師の影を追って走り続け、未だその影を踏むことさえできないほどの影響下にあることだけを特記しておきたい。

つまり、練習の量という場合、時間ではなく走る距離を指すが彼の場合これがまた人並みではないのである。一般にトッププレイヤーは練習量が決定的に多く、自己のもてる力(才能)を咲かせる。それにしても瀬古の場合は常軌を逸しているとさえ言える。高校時代のコーチ色幹夫も「人の2倍は、いや3倍は走った」と認めており、大学に進んでからの1日のランニング距離は、平均30 kmから40 kmにも及ぶ。この距離を毎日こなすことはたいへんなことだ。しかし、彼に言わせるとそれほどでもないらしい。「ボクにとって走ることは食事をすると同じです」という瀬古にとって、走ることはもはや「走ることに人一倍の情熱をもつ」こ

とを越えて、「ランニング中毒」であり麻薬中毒に似たところがある。中毒は昂ずれば命とりになる。走ることが食事をすると同じになり、それしかなくなったとき、薄ら寒い不安が将来現実のものとなりかねない。すなわち、現役を引退し、ひとりの社会人となったとき、適切にギアチェンジできる保障はどこにもないのである。しかし、ここにトッププレイヤーとしての面目があるのかも知れない。目標に向かって燃え上がり、燃え尽きる覚悟をトッププレイヤーは常に要求されているのである。そして、ほとんど精神に嫌気を感じとっている現代人に一服の清涼感を与えずにはおかないのである。(なぜ、走るのか)、「好きだからです。走っているときはそれは苦しいですけど、苦しいと思って走ったことは一度もありません。42.195 km は苦しいけどやっぱり好きなんですよね。走り終わった時の喜びは何よりも大きいです。走った人だけがわかる征服感。いいですね」(宮島泰子『走れ、瀬古利彦』, p. 185)。

### 3 挫 折

逆境は、人を変える。

瀬古の場合、2つの逆境の側面を体験している。すなわち、精神的原因による挫折と身体的原因による挫折であるが、両者はほんらい帰一無二の関係にあり、ほんらいどちらにウエイトがかかっているかという問題にすぎない。また、瀬古の挫折からの立ち直りのきっかけは、主として精神的な拠り所に重点がおかれたといっ

まず、精神的な原因による逆境は、早大受験失敗後失意のアメリカ留学を終えて帰国し中村清との運命的な出会いまでの約1年間である。これが1回目の挫折である。四日市工高に在学中“怪物”の異名を奉られるほどの戦績を誇った瀬古は、早大に進み大学陸上界で華々しく活躍することが当然のこととして期待された。しかし、受験の結果は「サクラチル」で失敗。

翌年の入試までの1年間のブランクを如何に過ごすか。瀬古にとってこれが当面の問題で

あった。入試突破が至上命令であること以上にもうひとつの課題はマラソンであった。この問題をスポーツ留学という方法で処理しようとした。ここに問題があった。入試に対してもマラソンの競技力向上への備えにしても、アメリカ留学から得たものはほとんどなかったのである。そして、そのことは羽田を出発する時、既にわかりすぎるほどわかっていた筈である。入試への準備はいうに及ばず、マラソンの競技力向上についても指導者なしの我流で“留学”という美名に身を託した瀬古にとって、ロスアンゼルス空港までの飛行時間は暗くて長い時間になったに違いない。

この種の選択は、ひとり瀬古に限ったことではない。およそ華々しい戦績をあげ、世間の注目を集めた選手にとって、突如ただの人間にかえることほど辛いことはない。それは奈落の底に突き落とされるのと同様、精神的に耐えられないほどのショックを受ける。そして、このショックを柔らげ平常心を取り戻すための方策が取られる。この方策は世間の注目に耐え得るものでなければならない。それでこそ自身の気持ちも落ち着くというものだ。しかし、実際に世間は本人が思っているほど注目しているものでもないし、自身の気持ちも本当の安らぎを得るのは難しい。それはこの方策なるものが形式上のものであり、実態を伴わないからだ。

瀬古の場合、この方策はアメリカ留学というかくれみのであった。それが目的に正面から対応し得ず、逃げ道として使われた以上、やがて世間からも忘れられ自身の内側で悔恨の根のみ大きくする結果となっても仕方のないところである。

実際、瀬古にとってスポーツ留学として籍をおいた南カリフォルニア大の7カ月は一体何だったのであろうか。入試への準備を本気でするには如何にも場違いであり、周囲を見渡せば正規の学生ばかりで“浪人”は誰もいない。また、スポーツ留学だとわり切っても、私費留学である。そのうえ、マラソンの指導者もいない。ただ、我流でアメリカの土を踏むだけの、砂を噛む思いの足取りであったに違いない。

こうしたことから生ずるイライラ、不安、焦りは一般に欲求不満という言葉で表される。そして、欲求不満は、時として、腹にものをいっぱい詰め込むことで解消される。都合のよいことに、アメリカは食うものが安い。レストランにはいって5ドルも出せば、ぞうりほどもあるステーキがドサッと目の前に置かれ感激する。そして、生活を取り巻く環境が陽気ときている。とくにカリフォルニアの空は青く、人々は陽気である。ひとたび欲求不満の解消が食うことに向けられると、その際限を知らない。

瀬古が失意のアメリカ留学を終えて帰国した時(1976.1.10)、体重は67 kgに達していたと言われる。快調時の体重が59 kgと言うから、8 kgの増加である。この8 kgは、失意の重さを表している。

8 kgの悪夢は、ただ単に精神的な失意にのみ終ることを許さなかった。一流選手の宿命として以前の記録がひとり歩きし、試合に駆り出され、重い足取りで敗北を噛み締めなければならなかった。

しかし、帰国後の入試準備には力がいっただけに違いない。名ばかりのアメリカ留学から得た失意がバネになり、またスポーツマン特有の集中力の良さが発揮されたとしても不思議ではない。とくに、一流選手の集中力は素晴らしい。

ともかくも、瀬古は挑戦2度目にして早稲田の角帽を手にしたのである。そして、3月26日、まだ正規の早大生としての儀式を待たずして、中村清と運命的な出会いの日を迎えることになる。一般に大学の運動部は入学試験に合格すると直ちに、有望な新生を集めて練習にはいる。瀬古もそのひとりであった。しかし、大学入試は突破しても、彼のマラソンの力は自己の壁を突破するどころか大幅に後退を余儀なくされていた。それは体重8 kg増を“瀬古の海”と先輩や同級生にからかわれた一件をみてもわかる。

この時、まだ瀬古の前に希望の光は指していなかった。まして、世界的ランナーとして国民の熱い視線を受けるべくもなかった。また、その重圧に耐えなければならない将来が待っていることも想像だにし得なかったのである。しか

し、光は向こうからやってきた。それは自ら探し求めてやっと手に入れた類いのものではなかった。不意に自分の前に現われ、やがてその光に覆いかくされることになった運命的光であった。

中村清。入試の失敗。その結果としての失意のアメリカ留学。そして、マラソンの不調という挫折から瀬古は、はい上がった。しかし、それは導かれてはい上がったにすぎない。その時中村は、右手に精神論を左手に陸上競技をもって瀬古の前に立ちはだかり、彼を丸ごと救い上げた。そして、そのウエイトは右手にあった。

2回目の挫折は、世界のマラソンランナーとしての地位を不動にし絶好調とうたわれた1981年(昭56)4月のボストンマラソン優勝後の1年10カ月に及ぶ長い不調である。

この年4月20日に2時間9分26秒でボストンマラソンを制した後、7月9日にストックホルムで開催されたDNガラン国際陸上1万メートルに出場し2位になった。その翌日、瀬古はオスロの湖畔のクロスカンントリー・コースで汗を流していた。異郷の素晴らしい景色に目を奪われたか、不注意にも松の根っ子に左足をひっかけ、捻挫してしまった。これが長い不調のはじまりになるとは、彼自身思ってもみなかった。それ以上に、走ることに半ば飽きていた——というよりも、走りに慢心の影を宿していたといった方が性格かも知れないが——彼にとって、ケガして良かったという気持ちがあったとしてもそれほど不思議ではなかった。

ボストンマラソンを制した後の瀬古は、日本陸上界の華としてその実力を人々の頭にたたき込んでいた。しかし、瀬古とて人の子。いつまでも坂道を登り続けられるものではなかった。最初の左足の捻挫に続いて、同じ年の秋、神宮外苑の絵画館を回るコースで今度は右足を捻挫してしまった。このアクシデントはやがて、左足の土踏まずに激痛をもたらし、左足の膝の痛み(腱鞘炎)をもひきおこすことになった。

こうなっては走れるものではない。瀬古は身体的ダメージ以上に精神的にたたきのめされた。そして、走れないことの苦しさをいやがう

えにも味わった。周囲の者も気遣った。とくに、父勇は「間違っても、円谷のまねだけはしないように」と心を配った。円谷幸吉と言えば、東京オリンピック（1964）で3位に入賞し国中を湧かせた名マラソンランナーだった。その彼が、「もう疲れきって走れません」と遺書を残して自らその頸動脈をカミソリで切り、果てたのは昭和43年1月9日のことであった。2人とも強い共通点をもっており、これが父勇の瀬古の結末への危惧を誘発したのかも知れない。2人とも生真面目で走る以外に趣味がない。そして、共通点はもうひとつあった。それは国民の「重すぎる期待」であった。

しかし、円谷と瀬古の時代的背景は25年間のうちに、大きく変わっていた。国民の「重すぎる期待」がそれだ。25年前、確かに日本は未だ戦後の暗い社会情勢の尾を引きづっていた。そうした中で、ひたむきに自己の心身を極限にまで駆使し、実力の支配するスポーツの世界で他より優れていることを証明しようとする姿は、見る者の心を捉えて離さなかったに違いない。マラソンのもつ堪え忍ぶ側面が人々に感銘を与えたのである。それ故、国民の期待は重く大きかったのである。

しかし、瀬古の時代は明るく希望に満ち、満ち足りた不安さえ覗かれる社会である。人々は戦後の暗さを忘れ現実の豊かさに酔っている。今日の豊かさが明日も続くことを疑わず、豊かさを満喫している。しかし、その先にこの豊かさがいつまでも続く筈がない、との漠然とした不安が顔を覗かせてはいるが。とにかく、瀬古の足取りには軽やかな響きがある。人々はその足取りに堪え忍び明日への希望を託す代わりに、スポーツごころを楽しんでいる。人々は瀬古の足取りに生活の重みをかけるのではなく、豊かな生活をさらにエンジョイするものとして楽しんでいる。それはもはや消耗品としての一種の情報にすぎない。それ故、国民の期待と言っても円谷の場合ほど深刻ではない。

「円谷のようになってはいけない」という懸念は、また瀬古自身の性格にも救われている。

「生真面目で走る以外に趣味がない」のは事実

としても彼の走る身体を支えている精神は、どこことなく明るく物事にこだわらずさっぱりした現代青年のさわやかさを感じさせる。

といっても、瀬古にとって走れないことは苦痛であった。そして、走れないことが走りを救う結果になった。「走る以外に趣味がなく」「走ることは食べることと同じ」と言い、「一生走れたら幸せ」と言い切る瀬古にとって、走れないことはこの上ない苦痛であり走ることへの情熱をかきたてるエネルギーとなった。

しかし、情熱がかきたてられても身体がついてこなければ何にもならない。このもどかしさを彼は、「ひざを切り裂いてみたい」と言い、鉄アレイでの上半身の鍛練と歩きで凌いだ。

そして、1年8カ月にわたる不調の中でその挫折から立ち直るきっかけを掴んだ。それは走ることの意味の大きさを知り、走る喜びを取り戻したいという心の働きであった。それはケガを恐れることからケガと闘う気持ちとなってあらわれた。

1983年(昭58)2月13日。東京—ニューヨーク友好'83東京マラソンに出場。2時間8分38秒のタイムで優勝。復活。ゴール直後満員のファンはマイクから流れる瀬古の声に一瞬息を呑んだ。そして、次の瞬間、拍手の渦が競技場を覆った。後に彼は語っている。「ケガが、ボクを大きくしたんです。それまでどこかでフンという気持ちで聞いていた中村先生の言葉が、しみるようにボクのなかに入ってきたんです」(木村幸治、『瀬古利彦』p. 53)。

こうして瀬古は2度の挫折から立ち直った。一度は入試の失敗から逃避し、中村清に会うことで正常に引き戻された。もう一度はケガによって走れないことに苛立ち焦りもがく中で走る意味を知り、走れない苦痛を精神的なパワーに転化させ練習を充実させたのである。すなわち、走る喜びを取り戻したいという気持ちによって救われたのである。この気持の背後には、中村清があった。中村の神秘的陸上教の信者としての顔があった。

#### 4 師の影を踏めず

1976年(昭51)、3月26日。早大競走部の館山(千葉県)での長距離ブロックの春合宿。この日師弟の出会いがあった。この時2人とも正確には早稲田の人ではなかった。瀬古は入学式を済ませていない身で春合宿に参加していた。大学の運動部は、早稲田に限らず、有望な新入生をまじえて春のトレーニングを入学式前から開始するのが半ば慣例となっている。また、中村もこの時正確には早大競走部の監督という地位にはなかった。東急の陸上部監督を辞めて10年余りを経ており、また早稲田の監督を去って17年余りの歳月が流れていた。この間中村は陸上から引退し、専ら沈思黙考の日々を送っていた。しかし、時代の波は中村を求めた。早大競走部OBにとって、母校の戦績を見るにつけ落日の感を拭えなかったのである。「なんとかしなければ」の願いと焦りが、中村を書斎からグラウンドへ担ぎ出さずにはおかなかったのである。

そして、この日、中村は瀬古に会い、命を賭けることを心に誓った。後に中村は、「瀬古は神様が私に与えてくださった宝物です。中村は11歳の時から一生懸命60年近く陸上をやってきた。そして、こうして老いさらばえた。可哀相だと思って人生最後に宝物をくださったのですよ。」(石井信、『瀬古利彦の42.195 km』, p. 198)と述懐している。ここにスポーツ界のひとつの師弟関係のパターンが組まれた。それは異常とも思える師弟の結びつきを背景に才能が花開いた典型である。ともかくも、出会いの日から7ヵ月後に中村は正式に早大競走部の監督に就任し、1984年(昭59)、2月3日に辞任した。この間、神様の与えてくださった宝物は、日本陸上界の華と咲き、世界のトップマラソンランナーに成長した。

中村清。大正2年、6月1日朝鮮京城生れ。1984年10月1日現在71歳。11歳の時走りをはじめ、16歳の時土屋甲子雄(当時の1,500メートル走の日本記録保持者)の指導を受ける。2年後「第17回全国中等学校陸上選手権大会」(神

宮外苑競技場、東京)に出場、800メートルで優勝。1936年(昭11)にはベルリン五輪(1,500メートル走)に出場したが予選落ち。2年後に関東大学選手権で樹立した1,500メートル走の日本記録(3分56秒8)は、以後13年間破られることはなかった。

早稲田大学を卒業した後、陸軍中野学校を経て満州へ(憲兵隊長)。戦後は苦しい生活の中で陸上競技の指導にのりだした。戦後の焼け跡の中で、中村は間口3メートル、奥行き5メートル四方の空間に三畳間の畳敷きの居間と土間のある“店”をもった。道路に面した土間にリンゴ箱をショーケース代わりに並べ、“賃巻きタバコ”，焼酎，カミソリなどの日曜雑貨を並べた。それは荻窪駅南口(世田谷、東京)の闇市の一部であった。まさに、戦後の食うために生きなければならなかった時代であった。こんな時、かつての中村を慕って早大競走部の部員がやってきた。中村は、彼らに食物を与え、陸上競技への情熱をふりそそいでいった。

そして、昭和34年の箱根駅伝を最後に早大競走部のコーチ役を降りるまで、後輩の指導育成につとめることになる。その後、東急の監督を努め、昭和39年の東京五輪では日本陸連の競技本部長(選手強化の責任者)を勤めた。しかし、東京五輪後は日本陸連からも遠ざかり、また、実際にグラウンドに立つ中村の姿を見ることはできなかった。

昭和34年早大競走部のコーチを降り、昭和40年東急陸上部の監督を辞した後、長い空白の期間、中村は書を読み思索にふけた。しかし、陸上の2文字は頭から離れなかった。むしろ、陸上を完成させる手段としての読書であり思索であった。そのために哲学書を読み宗教書をひもとき、歴史書に目を通し音楽、つり、狩猟にまでその関心の幅をひろげた。こうした中で彼は、人間そのものがプレイを左右することを確信するにいたった。

とくに、人間の内容が戦績を決定する、という半ば信仰的な確信は共鳴できる。こうした立場は現代のスポーツ界では少数意見に過ぎない。技術分析が進み合理的な科学トレーニング

偏重の時代にあって、中村ほどの人間教育を選手育成の前面におく指導者は少ない。それは自ら火の出るような自己革新に燃えていない指導者にとって、選手に人間教育を語れる資格もなければ、それを主張するには余りにも人間教育の理論そのものが座りが悪いからである。

しかし、中村の中村たる所以はここにある。練習時間の多くを精神論をぶつことにおき、自ら奇行を演じてみせる。突然草や砂を口の中に押し込んでみせたり、立木に頭をぶつけてみせるのである。しかし、奇行は計算されている。それは内面の激しい情熱の発露であると同時に選手の注意を集めることにあり、奇行そのものに意味がある訳ではない。

こうした中村の多弁と迫力のもつ選手への感化は、大きい。しかし、感化の方向は常に一方向的であるとは限らない。よく感化され増々中村を慕い一体化していく場合と、反発しこころ離れをしていく場合がある。そして、よく感化されるのは若い選手に多い。それは思考様式の固まっていないものにとって強烈な指示ほど有効であることに負っているのと同時に、良く感化されるものが指導者の良い面を素直に受け入れ、且つ何でも良い意味に解釈する傾向をもっているからである。

これらのことは、中村の門下生についても言える。そして、中村の言行を良く解釈し心酔したものが、トップランナーに成長していったことも事実である。瀬古はその典型である。門下生のひとり佐々木七恵も中村の言葉に打たれたひとりだ。(木村幸治、『瀬古利彦』, pp. 148-149) 「陸上はスポーツじゃないんですね。生き方そのものなんです。」「人間性が向上しなければ陸上の記録もついてこない。フォームはイコール人間性だ。」そして、中村のマラソンは単なるプレイを越えて芸術にまで到達する。「いいですか。マラソンは芸術ですよ。軽くみてはいけません。全身全霊をささげねばなりません。それでも終りはありませんよ」(同, p. 176)。すなわち、中村のマラソンはその技術論の根底にアサー・リディアードの理論(Run To The Top, 竹中正一郎訳、『中・長距離のトレーニング』)

をおき、その上に精神論で色づけしたものとみてよい。その精神論は、彼自らの言に従えば「自分の人生全部を集約してできあがったもの」ということになる。それ故、中村その人の生きざまが、門下生にとっては生きたテキストなのだ。

しかし、すべての門下生が中村に心酔したわけではない。それは彼の精神論の強烈な臭みと言行不一致に根ざしている。それは中村のマラソンに対しての狂信的な熱情の然らしむところであるが、度を過ぎた場合の悪弊の一端をここに見ることができる。精神論をぶつ時、それが臭みを伴う限り、内容と実体の間に許容すべからざる距離が存在する。この距離が反発と冷笑を呼ぶのである。昭和51年早大競走部の監督に就任した時、「オレが教えることになった。死ぬ気で教えるから、その気でやれ」と選手を前に檄を飛ばしたが、その反応は必ずしも満足できるものではなかった。横山勝敬(早大競走部OB, 昭52年卒。現、三井物産勤務)は、中村の監督就任に対して次のような感慨をもらしている。「ボクらには、拒否反応がありました。やたら風変わりなんです。神がかりの長説教はあるし、壁に頭をぶついたり、学生の前で草を食べてみせて、陸上への殉教精神を説かれるしで、初めてそんな人に接した僕らは、たいへんとまどったわけですよ。」(同, p. 97)。

監督就任後も中村講釈は練習時間の大きな割合を占める。そして、それは一部の選手にとっては、単にエゴイスティックで不健康でグロテスクな情念として映ったに過ぎない。それほど現代青年は、ドライで物事にこだわらない一面を強くしているのである。とくに、人並み意識を下敷にした選手にとって、狂信的情熱などというものは迷惑以外の何物でもなかったに違いない。それはスポーツとしてのマラソンを楽しむ者に修業としての行を強要することを意味したからである。

そして、中村自身自己の言行不一致を否定しない。この点は陸上関係者の口にするところでもある。その批判は、神聖な話をするわりには自ら人格訓練がなされていないというものである。また、妻道子の指摘も厳しい。「日ごろから

内村鑑三だの、武蔵だの、正法眼蔵だの、おっしゃるわりには、自分の性格はちっとも良くなるじゃないじゃありませんか。嘘つきだし、人の悪口ばかり出てくるし、……」(木村幸治、『マラソンは芸術です』, p. 207)。こうした言行不一致をなじる声に対して、中村は動じない。それは中村自身人格向上への努力を人一倍やってきて、自ら聖と俗の微妙な交錯が人一倍強いことを知っており、人格向上への難しさをいやというほど知っているからだ。とくに、妥協を許さずとことんまでやる一徹さは、直そうと思っても直りきらないほどの業となって彼の内側で燃え続けているに違いない。その業火を背負って文学に、宗教に、哲学に、果ては科学にまで救いを求める。そして、それらが何ら業火をいやし切らないことを知っている。と同時に、マラソンへの燃える思いの中にこの業火が融け霧散することを知っているのではあるまいか。

それ故、中村は周囲の批判に耳をかさない。かさないばかりか、挑戦的ですらある。はたで聞く者が耳をふさぎたくなるほど選手をなじり、その言葉は苛虐的でさえある。そして、言葉に酔い形相さえも一変する。彼は時として周囲から劇業扱いされる。早大競走部監督として迎えようという話が持ち上がった時、OBの中から「果たして学生がついていけるか」という声が強かった。このため、2年間という期限がつけられたほどだ。こうした事情からもわかるように、中村とOB、選手の間で反発は強いものがある。しかし、中村は選手を強くすることに徹している。そのために他のすべてを犠牲にする。ある納会で中村は反発していた選手たちに向って次のように言った。「おまえらはのお、オレが憎くて見返してやろうと思って頑張った。いい記録が出たじゃないか。……オレを憎んで、それでおまえらはいい記録を出した。出させたオレが、おまえらに勝ったんだ……」(別所功、『闘走!』, pp. 77-80)。

ここに中村の限界がある。確かに反発心をバネにやる気を出させ戦績を期待する考え方はある。しかし、このやり方で中村のいう人間教育はあり得ない。中村講釈の内容は一言で言えば、

“戦績を左右するのは人間の高さだ”ということにある。走る人間そのものが走りを読める指導者に反発し、憎むとき、中村の講釈は空しい。こうした人間関係の中でいくら強い選手が養成されたとしても(そのこと自体、中村理論からはあり得ないことだが)、指導者を通じての人的向上は望むべくもないことだ。そして、実は中村自身、育てた選手が自分から離れていった淋しさを噛みしめてきた。

しかし、「神様が与えて下さった宝物」を手にして以来、中村は自己の指導理念とやり方が間違っていなかったことを噛みしめているに違いない。それは他からとやかく批判されようとも、強い選手をつくったものが勝ちだという戦績即評価主義に負っている。この考え方は指導者のひとつのパターンであり、東京五輪でわかせた飯島選手を育てたかつての暁の超特急吉岡隆徳もそのひとりだった。そして、引退後、飯島は強ければどこでも採ってくれるとの考えが通用せず、就職さえままならなかった。

このことは、瀬古にとって将来解決を迫られる伏線の意味をもつ。瀬古にとって父勇の「円谷のようになってはいけない」との危惧よりも、一層重みをもつ。すなわち、瀬古にとって走ることの重圧に耐えることよりも重圧が解かれた後、自分をどのように自らコントロールしていくかが問題なのだ。まさに、この意味でのギアチェンジが重要なのであり、その適切さをもって中村の指導者としての真価が問われるのである。

瀬古は、今なお走り続けている。中村と出会って8年になる。そして、瀬古の前には中村がいる。中村は瀬古にとって巨人であり神である。その神は陸上に心酔し希有壮大な陸上教を説く。信者が神の御影を踏みにじれない如く、瀬古もまた中村の影を捉え追い越すことはできない。中村が唱え瀬古が形にしてみせようとするマラソンとは、いったい、どのようなものであろうか。



## 5 マラソンは神への道

マラソンは、42.195 km 先のゴールに如何に速く達するかという競技である。その際、自分の肉体を如何に速くゴールに運ぶかが問われる。と同時に、ランナーは精神をも運んでいるのである。とくに、マラソンランナーにとって長丁場をひとりで走りぬく精神力は、人並み以上のものを要求される。それは自分との戦いであり、如何に自分をコントロールするかという精神的健康の根幹にかかわる問題である。それ故、マラソンの魅力は尽きない。とくにランナーにとって走ることの中に自分という人間を最大限形にしてみせることのできるのがマラソンである。ここにマラソンが楽しさを越えて求道的存在となる素地を見ることが出来る。そして、求道的存在に人生の師が介在する余地がある。

中村と瀬古の関係をみても、このことは言える。しかし、求道の具体的場としてのマラソンに走りの師があらねばならぬ。およそ求道は具体的な身体の動きを介して行なわれるのが通例である。ちなみに、剣道、柔道、相撲道、杖道、といったものから香道、華道、茶道といったものにいたるまでその究極の目的は道を究めることにある。その際、各々の身体的動きもしくは制約を通じて、それを便法として道を究めようとするにすぎない。現実には身体的動き、もしくは制約をスポーツとして楽しみ芸術として観賞し楽しむことで満足する傾向が強いけれども、本来は道を求めるひとつの手段にウェイトがおかれていたのである。中村がイメージをつくり瀬古が形にしてみせようとするマラソンにおいて、それは道を究めるひとつの手段に過ぎない。走りのテクニックから言えば、中村は既述のアーサー・リディアードを基本に多くのデータ分析から中村方式とでも呼べるものを持っている。しかし、その中身は何うことすらできない。というのは、中村は走りの精神について止まるところを知らないほどの言葉を口にするのに反して、こと走りの理論については“企業秘密”と称して一切語らないからである。それは背景に理論で人間は走らないとする考えを

もっているからである。

それ故、中村は24時間の枠一杯を使ってマラソンを捉える。走るのは人間であり、テクニックではない。そこに中村独特のマラソン芸術論の根拠がある。立派な人間が走って初めて立派な競技ができるという彼の考えの背景には、ランナーにすべてを託しランナーがそれを体現するという信念がある。全身全霊を捧げてマラソンに取り組み、その結果をレースに体現してみせる。それはマラソンコースというキャンパスに選手という素材を通して一個の芸術の華を咲かせることである。現に中村は、一年に一度の大輪を咲かせ試合に勝つために綿密なプランを練り実行する。

中村によると選手の満足できる体調は1年に1日か2日ほどしかないという。その限られた日を試合当日に合わせるために、逆算方式でコンディションづくりに取り組む。と同時に走りのテクニックも自在に変えてゆく。それはいままでのすべての練習方法を頭に入れながら、常に新しい方式を取り入れる方向で行われる。このことは何でもないようなことだが、実際にこれを行うことは難しい。それはマラソンへの情熱に支えられて初めて可能になることだ。

中村はこの情熱の湧いてくる源を宗教、哲学、科学、文学など手当たり次第に求め彼の人生体験の濾紙を通して醸成する。そして、その根源をさかのぼれば、神に到達する。それは言ってみれば、神に支えられ、神の意志によって走る喜びをかきたてられ、神のために走る、ということになる。この図式は古来スポーツの根源を支えるものであった。

心の底から走りたい、走らずにはおれない、という情熱を常にかきたて、走りのテクニックを植えつけていく。そして、半年か1年がかりで盛り上げ、大輪の花を咲かせるのである。それ故、瀬古にとって中村の存在は大きい。中村は自ら神の言葉を自分の口を通して代弁しているに過ぎないと言っているが、瀬古にとって中村その人が神である。瀬古にとって走る原動力は中村であり、その背後に神がある。

新旧2つの聖書を座右の書として仰ぐ2人に

とって、マラソンは神への道であり、人間を磨くひとつの手段に過ぎない。そこには、師弟の関係を越えた珠玉になり合う者どうしの深い絆がある。

こうした関係は日本のスポーツ界において、極めて希有なことであり、それが8年間も続いたことに一層の驚きを覚える。そして、この師

弟関係が異常であり中村の偏質的愛情が瀬古を洗脳したに過ぎないのか、逆に中村の口からついてくる言葉に真実がありそれが瀬古をここまで育て上げたのか、現在のところ断を下すには早すぎる。答えは、中村を離れた瀬古自身に懸かっている。(1984.10.1 脱稿)